

談話室

▼1931(昭和6)年は山辺町出身の安達峰一郎が常設国際司法裁判所長に就いた年である。同じ年に満州事変が起り、日本は戦の泥沼に陥っていく。心を痛めた安達は体調を崩しながらも平和の理想を抱き続ける。

▼65歳で世を去る34年には、こう記した。「国際司法に一身を捧ぐる事と決候上は忠美に之に竭す」。外交官だった自分が国をまたぐ司法判断を一生の仕事にすると決意した以上は、誠心誠意尽くすと。郷土の先人も献身した国際司法の現場が、このところ注目を集めている。

▼戦争犯罪を行った個人を訴追する国際刑事裁判所が、ロシアのプーチン大統領に逮捕状を出した。ウクライナから子どもを連れ去った蛮行に関与したという疑いだ。ロシア側は戦地から避難させたと主張するが、ウクライナ当局は連行された1万6千人超の身元を特定した。

▼山辺町には安達の軸が残る。「先憂後樂依仁持正 以期万邦之平和」(人に先んじて憂い、人の後に樂しむ。仁に基づき正義を保ち、世界平和を期す)。プーチン氏を実際に裁くには、高いハードルがあるらしい。だが、正義を胸に独裁者と対峙しながら平和を希求したい。

〈2023年3月21日〉